

学びあうような積極的な姿勢と、はっきりした目的意識をもってOSIPPを支えていく存在になるよう期待する。私も現在の研究に新たな学問から知を取りこんでいるところ。切磋琢磨していきたい。」

現役自衛官と学生が 相互訪問して安保議論

WINS 2001
初の試み

阪大に21年、林教授最終講義 公共政策未来学を説く

林敏彦教授の退官記念講義が1月29日、OSIPP棟・講義シアターで行われた。大阪大学で21年間教鞭をとった林教授の最終講義とあって教官、OB・OGを含む学生など大勢が詰めかけた。

講義は「公共政策未来学」と題し、学問分野としての公共政策学、公共政策の策定過程、国際公共政策研究科(OSIPP)の3点の未来について説いた。

まず、「公共政策学は、幅の広い知識と経験を必要とし、学問的かつ目の前の政策課題に対する深い洞察力を要する」と述べ、しかし加えて「人間社会に対する、あるいは人間そのものに対する非常に深い愛情が最後には重要」と解説、つまり「学問は道具の一つであり、これを使って人間社会に対し何をしたいのかが問題」と指摘した。

公共政策策定過程の未来については、霞ヶ関が独占する現状に対し、「これからの政策形成は形式的・権限重視のガバメントから参加型のガバナンスへと方法を変えていかなければならない」と述べ、いくつかの政策のアイデアがエンドユーザー(国民)の前で政策のマーケットで比較されることがチェックアンドバランスの観点からも重要、と説明した。

最後に「未来」は、決して水晶の中で予測するものではなく、今の自分の行動がつくっていくもの、という言葉をもって講義は幕を閉じた。

OSIPP学生と自衛隊員が共に日本の安全保障について議論しようという「国際安全保障ワークショップ

2001(WINS 2001: Workshop on International Security 2001)」が、10月から12月にかけて4回にわたり、OSIPP学内外で行われた。このワークショップは、OSIPP院生と現職の若手幹部自衛官とが共同で様々な手法により今日の国際安全保障の諸問題や日本の安全保障政策のあり方について新たな視点で考察することが目的。自衛官をOSIPPに招いたり、学生が自衛隊基地を訪問して、率直な意見交換、交流が学問と実践形式を織り交ぜて実施された。この企画は星野俊也助教授の呼びかけで、自衛隊大阪地方連絡部との共催により初めて企画された。

第1回は10月22日、自衛隊大阪地方連絡部山本敦督・一等陸佐ら12人がOSIPPを訪れ、「国際安全保障と我が国の防衛政策」について、OSIPPの学生と約2時間にわたり討論した。

第2回は11月1日、「多様な役割を担う自衛隊」というテーマの下、自衛隊施設の見学とブリーフィングを受ける機会が設けられた。OSIPPが

基地の合宿では徹夜で危機管理練る

ら参加した教員、学生ら約30人は、八尾飛行場から自衛隊のヘリコプターに乗って海上自衛隊舞鶴地方総監部(舞鶴市)を訪問。午後には陸上自衛隊福地山駐屯地(福知山市)に移動して陸上自衛隊を見学、防衛庁航空幕僚幹部の福江広明1等空佐の話聞いた。

第3回目は11月19日に再びOSIPP棟で開かれ、自衛官は約20人が参加。「日米同盟の現状及び将来の展望」をテーマに、陸自航空学校副校長の山口昇陸将補が「ブッシュ政権における安保チームとアメリカの防衛政策」、ロバート・エルドリッチ助教授が「沖縄基地問題のとらえ方」とそれぞれ題して講演し、その

後討論した。

最後にこれまでの総括として、陸上自衛隊伊丹駐屯地で12月21日から23日にかけて、2泊3日の「危機管理対処戦略」をテーマとした合宿が行われた。ここでは危機への対処に関するシミュレーションをロールプレイゲーム方式で体験。仮想の国を想定し、テロやミサイル攻撃を受けた日本がどう対処するかなどが問われ、学生と自衛官がいっしょになって徹夜をしながら対応策を練った。

星野助教授はこのワークショップについて「新しい試みとしてマスコミの注目も高かったが、院生たちが防衛実務の担当者に直接疑問をぶつけ、安全保障問題を主体的に議論できた意義は大きい。さらに工夫をし、発展させていきたい」と話していた。

学位論文口頭審査会で厳しい指摘

今春修了予定者の学位論文を審査する口頭報告審査会が12月6、7日、OSIPP棟で開かれ、修士(博士前期課程)39人、博士後期課程20人が作成中の論文について発表した。

一人の持ち時間は修士課程が20分、博士後期課程が40分。指導教官である主査1人と副査2人が報告を聞いた後、質疑応答を行った。審査会は公開で行われ多くの学生が傍聴した。

教官からは「問題解決の実効性があるのか」「論文テーマが今後社会にとってどのように活かせるか」などの質問が飛び、「参考文献の不足」「言葉の定義・脚注の書き方の不備」など細部にわたって問題点が指摘された。報告者は問題点を修正して、1月に最終的な論文を提出、その後学位論文審査委員会が審査をし、教授会での決定を経て3月に学位が授与される。